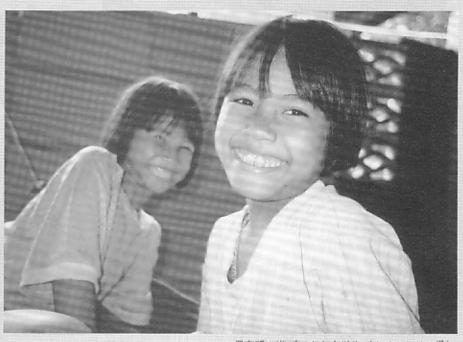
子どもたちの明日 Children, Our Future

CARING FOR YOUNG REFUGEES 幼い難民を考える会



保育所に遊びにきた小学生(タイ・スリン県) Elementry school children came to play in a child care center (Surin Province, Thailand)

1997年12月 No.44 目次

レポート

歌が大好きな子どもたちへ カンボジアの歌絵本完成 野村美知子

インタビュー

絵本に託す子どもだちへの願い タイの絵本作家パンヤチャンド教授に聞く

連載

響き合う心といのち

「マーブルチョコの貯金箱に」

田鳥敏子

レポート

小さな国際交流

石田桂子

最新情刻

カンボジアの公立幼稚園建設に協力

2 Report

For Children Who Love Songs Cambodian Children's Song and Picture Book

Michiko NOMURA

6 Interview

Wishes For Children Expressed In Picture Books

Interview with Prof.PANYACHAND

8 Series

Reverberating Heart and Life "Saving Coins in A Chocolate Box"

Toshiko TAJIMA

10 Report

Small Scale International Exchange

Keiko ISHIDA

12 Latest Developments

Cooperation for Construction of Public Preschool in Cambodia

歌が大好きな子どもたちへ

―カンボジアの歌絵本完成

キー 子どものための歌 第一集」を発行した。カンボジア事務所では、今年九月に「ぼくの犬アーカンボジアで歌われている歌や童謡を集め、CYR



「XV、おばちゃん、今日も歌ってごらん」 小学校入学をひかえた六歳の子どもたちに、二週間ほどもかかって教えてもらった

村中がそろって ほら働くよ クメールの里では 月の明るい晩に「クメールの里」

女衆は ほら米をついている 新しい家を建てるんだよ

姿のきれいな娘達は ほら機を織る砂糖を煮詰める者もいる

(「クメール」は「カンボジア」の意)

これが、私が最初に歌えるようになったおいボジアの歌でした。何とも美しい平和な時代の農村の暮らしが歌われています。一言葉が少しずつ分かるようになるにつれて、他にも美しい歌がたくさんあることが分他にも美しい歌がたくさんあることが分かってきました。

カンボジアの子どもたちも歌が大好きです。「保育所で新しい歌を覚えると、大喜びで家で歌って聞かせてくれる」「まだしゃべれない小さい子どもたちも、歌っているんだよ」とお母さんたちも言います。歌うことは、生きる喜びのひとつですし、新しいことを覚えるのは、子どもにとって成長の原動力です。歌は、その言葉、旋律、リズムにのせて、民族の感性が伝わっていく道のひとつでもあり得ます。

カンボジアには子どものための絵本や遊具がほとんどありません。子どもたちの好きな歌を絵本にし、歌っても、詩として読んでも、絵を見ても皆で楽しめるものとして身近に置いてあげたいという願いで『ぼくの犬アーキー 子どものための絵本や遊りは作られました。

も集めました。これまでに約三十曲の歌詞育所があるので、それぞれの村に伝わる歌らい、テーブレコーダーに録音し、いろいらい、テーブレコーダーに録音し、いろいらいを歌を覚えていきました。二つの村に保める歌を歌っても

カンボジア 保育事業担当

For Children Who Love Songs

Cambodian Children's Song and Picture Book

Michiko NOMURA Program officer, Child Care, Cambodia

CYR's Cambodia Office collected songs popular among children and published "My Dog, Arkee; Songs for children. No.1" in September this year.



"Om (Auntie), sing that song again."

10

"Home in Khmer"

At home in Khmer under the bright moon Villagers work, work so hard under the moon.

Men use planers to build a new house Women pound rice for the new house.

Some carve wood, some boil sugar Pretty girls work with a loom.

(*Khmer means Cambodia)

This was the song which six year old children spent two weeks to teach me.

This was the first song that I learned to sing. It is about the village life which used to be so beautiful and peaceful. As I started to understand the language, I realized that there were many other beautiful songs.

In Cambodia, children love songs as in other countries. Mothers tell me that "when they learn a new song at the child care center, they sing it to us at home", and "even small ones who cannot talk properly sing". Singing is one of the joys of living and learning a new thing is the driving force for children's growth. We learn about ethnic sensitivities through their songs as they carry words, melody and rhythm.

We made the first book of Cambodian songs and pictures by compiling children's favorite songs so that they and their family would enjoy reading them as poems, looking at pictures and singing them together in the country which has hardly any picture books and toys for children.

Following my arrival in December last year, I asked child minders and children to sing songs that they like, taped them, and memorized many, many songs. Traditional songs of two villages where the child care centers are located were also collected. About 30 songs have been collected.

Songs that people have been singing from the old days, children's cheering songs, and songs to which new words were written for children....

There are no songs recorded with musical notes like western music. As a rule, songs are carried down orally from generation to generation, and one village may sing them a little differently from another village. There may be different words to the same song.

すべり台の上でも歌う Singing even on the top of the slide







カニに切られないように 緑のじゅうたんのような早苗(さなえ) 守ってやろう

ていることもあります。

もありますし、同じ曲で、

別の歌詞を歌っ

「早苗の緑」 から

B

小鳥よ小鳥 うちの籾はにがいんだよ 隣の籾(もみ)はおいしいよ あっちへお行き 「鳥追いの歌」から

ちのよく知っている動物などの楽しい歌も あります。 でしょう。「ぼくの犬アーキー」「ミミズク 歌ったものも、 りの楽しさ、 鶴の魚とり」「岸辺の蛙」など、 などなど、大切な稲についての歌はやは 朝のさわやかさ、 月の光の清らかさ・涼しさを 暑い国カンボジアならでは 夕風の中での踊 子どもた

ある、普通の美しい風景と、 わる、そしてお話の一部にもなるようなも 絵はイラストレ 南国カンボジアの子どもたちの周りに ター の三田玲子さん 歌の内容が伝

村とあちらの村では歌い方が少し違うこと 音楽のような音符での記録はなく、基本的 をつけたものなどいろいろあります。西洋 に歌は口承されます。ですから、こちらの し歌、すでにある曲に子どものための歌詞 が集まっています。 昔から伝わる歌、子どもたちの囃(はや) Ė 援をいただきました。 全面的に東京海上火災保険株式会社のご支 のを、と描いてくれました。出版の費用は、

出来上がった絵本を子どもたちに見せた

すべり台の上に持って行ったり、 んたち・・・。ベンチにすわって歌ったり、 母さんに抱っこされて一緒に歌うおちびさ 歌」「次はこれだ」と次々に歌う子。保母さ んがするように本を見せながら歌う子。保 日中歌声が響いていました。 何人かで頭をくっつけ合って、「次はこの その日は

らも話が広がりました。 クみたいに髪を結んでね」。それぞれの絵か は全部で十五個あるぜ」「先生、またミミズ ○○ちゃんにそっくりだね」「にわとりの卵 「この犬はすごくかわいいな」「この子は

いてもらった絵本を抱えて家に帰りました。

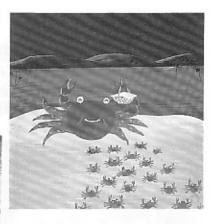
そして、一人一冊ずつ、自分の名前を書

どもたちに届けたいと願っています。 配りたいという希望が寄せられています。 に二百数か所ある識字教室付属の保育室に GOの支援している幼児教育施設にも配布 うちに持って行っていいの?」と。 この楽しみを、できるだけたくさんの子 教育省、 喜ばれています。女性省からは、 女性省、ユニセフをはじめ、 Ν

の第二集に入れる予定です。 (「クメールの里」「鳥追いの歌」 は、現在準備中







絵本より From the book

Birds, birds, go away
Neighbor's rice tastes so much better
Ours tastes so much bitter
From "Bird Chaser's Song"

Rice sprouts spread like green carpet Protect it from crab's scissors From "Green sprouts"

Many songs are about rice, the important element in people's life. Reflecting the heat of Cambodia, they sing of freshness of the morning air, joy of dancing in the dusk, and cleanness and coolness of the moon beam. There are joyous songs about animals popular with children such as "My dog, Arkee", "Eared owl", "Cormorant, the fish catcher", and "Frogs on the shore".

Ms. Reiko MITA, the illustrator, drew beautiful pictures of everyday scenes surrounding children in Cambodia which convey the content of the stories in the songs. Publication was supported fully by the Tokio Marine and Fire Insurance Co., Ltd.

When the finished book was shown to children, the day was filled with their singing voices as they sang one song after another; some sang while showing the book to others as the child minders did; small children sang together as they sat on the knees of child minders. They sang while sitting on a bench and they took the book to the top

of the slide.

"Dog is so cute!", "the child is so like her", "there are 15 eggs in all", "will you tie my hair like the owl again?". Pictures brought stories out of children.

Then, they went home taking a book with their name on it. "Can I take the book home?"

Books have been distributed to the Ministry of Education, Youth and Sport, the Ministry of Women's Affairs, and children's educational institutes supported by NGOs. The Ministry of Women's Affairs requested copies for distribution to child care centers attached to 200-odd literacy centers throughout the country.

Our wish is to share this joy with as many children as possible.

("Home in Khmer" and "Bird Chaser's Song" will be included in the second edition which is now being prepared.)

絵本に託す子どもたちへの願い

イの絵本作家パンヤチャンド教授に聞く

タイの自然と子どもの遊びを素朴なタッチで描いた絵本がある。 『わたしたちのまわりの木』(タイトル訳は編集部) の作者プリーダ・パ ンヤチャンド教授は、1957年タイ東北部ノンカイ県生まれ。シーナ カリンタラヴィロー大学美術文化学科卒業。現在同大学児童文学科 で教鞭を執る。自らのライフワークを、子どもの想像力を育てるこ ととし、その作品は英語、ドイツ語に翻訳されている。 (聞き手 バンコク事務所 シビカ・プラコブサンティスク)



ブリーダ・バンヤチャンド教授 Prof. Preeda PANYACHAND

のような仕事をするつもりはありません ちに描いてあげたりしていましたが、

もともと絵は好きで、

近所の子どもた

2

ためのイラストレー ŋ, しが頼まれて絵を描くという話が広ま でしたね。 を頼まれたんです。当時、 いったんです。 そんな頃 仕送りが足りなくなる時がありました。 た人に、 大学一年の時、 卒業論文のテー 絵を描き続けました。 課題で書いた物語のイラスト 以来、 大学院で児童文学を専攻して 大学院生の間で、 地方出身だったので、 マは ション」 「子どもの本の 1110 そんなことか となって 100 わた

幼稚園でも教えていらっしゃるそうで

うれしいものですよ。お話キャラバンで もが楽しそうにお話を聞いてくれるのは 絵本を読み聞かせたりしています。 園でですが、子どもに絵を描かせたり、 授となった今も、お願いして、 勤めていた出版社には幼稚園があったの ているかを知っておきたいんです。 もは何が好きで、どう感じて、 子どもの本を制作する者として、 小学生にも読んであげています。 そこで絵を教えていました。大学教 別の幼稚 何を考え 子ど 以前

子どもの本を制作するようになった お話キャラバンというのは?

もたちに本を届けようと、お話キャラバ で一番大切なのは、出来上がった本をい るかどうかも知りたいです。 んです。子どもたちが実際にわたしたち かにして子どもの手に届けるかだと思う ンを企画しました。 の本を読んでいるか、楽しんでくれてい ということで、自分たちで直接子ど たしの考えでは、子どもの本の仕事 それなら

ます。 わくわくすることですよ。 ていきます。 が来るほどです。 う反応するか、 反響はよく 市内の公立小学校や幼稚園を訪問してい た四人のグルーブで話し合い、 同僚の絵本作家や翻訳家などでつくっ 主に本の読み聞かせをしますが、 自分たちの本に子どもがど うちにも来てほしいと依頼 目の前で見るのはとても 今では市外にも出かけ バンコク

Ļ ます。 るために、 レーニングも始めました。 しかし、 広める手助けをしてくれる人を育て そこで、 四人での活動には限界があ 学校の先生を対象としたト わたしたちの 本を理解

しょうか 子どもの本に対する親の理解はどうで

でも、

を遊ばせている親が多い

テレビゲー

ムやコンピュ

よい本を探す親や教師が増えてきている

都市部を中心に、子どものため のは心配です。 ต้นไม้ใกล้ตัว

『わたしたちのまわりの木』 "Trees Around Us" ©Preeda PANYACHAND Published by Amarin Printing and Publishing Public Co., Ltd.

する機会がないのですから を供給してほしいのです。 親には、

CYRのようなNGOがよい本

彼らは本に接

こと、 と国の未来のために力を合わせていけ 願って描きました。そして、 然を知り、 入れられるもののことしか考えなくなっ を持っていることがいいこと、という消 てきている。 は自分のまわりにある自然を忘れ、 費主義的な考えが広まっています。 ほしいですね。タイ社会では最近、 いと思っています。 自分自身の考えをもてるようにな Iţ いたわり合うことを教えられれば 子どもたちに、身のまわりの自 わたしたち大人が、 楽しむことを学んでほしいと 「わたしたちのまわ この願いを叶える 分かち合う 子どもたち 手に 6 ŋ

子どもたちへの願いは?

ばと思います

農村部

今後に期待しています。

Wishes For Children Expressed In Picture Books

Interview with Prof. PANYACHAND, Author of Children's Books

"Trees Around Us" depicts the nature and children's games in Thailand with simple touches. Prof. PANYACHAND, the author, was born in 1957 in Nonghkai Province in the northeastern part of Thailand, graduated from Department of Arts and Culture of Srinakarintaraviroj University, and teaches in Department of Children's Literature of his alma mater. He has

authored many picture books for children hoping to nurture imaginative powers of children. His works have been translated into English and German.

(Interviewer; Sivika Prakobsantisukh, CYR Bangkok)

— What prompted you to produce children's books?

I always liked pictures and used to draw for neighbors' children. But I had not really thought I would be doing what I do now for a career.

When I was a freshman at the university, the money from my family sometimes was not enough. A graduate student majoring in children's literature once asked me to illustrate a story written as an assignment. I was paid 100 Baht a story. As word spread that I could illustrate their stories, I continued drawing. My thesis was entitled as "Illustrations for Children's Books".

You teach at a kindergarten

As a creator of children's books, I would like to be constantly aware of what children like, how they feel and what they are thinking. A publishing house I used to work for had a kindergarten attached to it and I taught how to draw there. Now that I am a professor, I asked another kindergarten to let me watch children draw pictures and read picture books aloud to them. It's a joy to watch them listen to your stories. In Story Caravan, I read to primary school children, too.

— What is Story Caravan?

The most important thing in the work involving children, in my opinion, is how to deliver a completed book to children. I want to know if children actually read and enjoy the books we make.

Four people including an author of children's books and a translator organized the Story Caravan. We visit public schools and preschools in Bangkok and read books aloud to children. Our visits are quite popular and we receive requests for visits. Now, we go out of the city. It is so exciting to watch how children react to the books which we created.

Even a team of four has its limitations, and we started training school teachers who would appreciate our books and help us to spread our activities.

— Do parents appreciate children's books?

I am concerned with the great number of parents who are satisfied with just giving TV games and computers to children. But I have expectations for parents and teachers who consciously



バナナの木で遊ぶ ©Preeda PANYACHAND A page from the book; "Playing with banana tree"

look for good books for children, particularly in cities. I do hope that NGOs as CYR will continue distributing books to parents in rural areas. They have such little chance of coming across good books.

— What do you expect of children?

I hope that they will be able to have opinions and thoughts of their own. In our society, consumerist thinking that owning goods is better is spreading. People forget nature which surrounds them and think only of what they want to acquire. "Trees Around Us" was created based on the wish that children would learn about and enjoy nature around them. I hope the book will teach them how to share and care about each other. We grown-ups must get together and strive to realize that wish and build a better future for children and our country.

響き合う心といのち

「幼い難民を考える会」が活動を始めて17年。 タイの難民キャンプ、タイやカンボジアの村々の子どもたち、 そして日本に定住したベトナム、ラオス、カンボジアの人たちとともに歩んできました。 それぞれの現場で、子どもたち自身がもつ「育つ力」に励まされながら 様々なかたちで会の活動に携わってきた人々が、 をどう生き、何を考えているかをご紹介します。

マーブルチョコの貯金箱に

田島敏子



家族と一緒に (左から二人目が田島敏子さん、右端はタイからの 留学生グアンさん)

Family with an exchange student from Thailand, Guan (right). Mrs. Tajima, second from left

病と障害をもって生まれました)。長女 状を読んでからだったと思います。私 ものためのマンスリー募金などに参加 賛助会員になったり、 長女を九か月で亡くしました(心臓 近くの障害児の作業所作りの会 ユネスコの子ど

夫は常々 賛成してくれたので、 部がKDDからCYRに寄付されます) しないと、 す でライオンズクラブで活動しています。 ています。本当は、 体を動かせない人はお金を出す」と言っ 流す活動がよいのでしょうが (登録しておくと、 子どもたちは強制しないので無関心で 夫はKD 。自分自身が痛い思いや悲しい思いを 「お金のない人は体を動かし、 他人の痛みや思いを慮 Do ボランティアダイヤル 国際電話の通話料金の お金も出すが、 登録しています。 。夫は地域 (38 汗も に けてほしいと思います 子どもたちの笑顔には救われます。 送られてくる領収証のハガキに印刷された まだ完全に平和になっていないカンボジア 努力と知恵で、 の現状は嘆かわしい限りです。CYRから

ったときの精神を大切に、勇気とそして

会を

平和になる日まで活動を続

どうもありがとうございました。

活をしているというニュースに接した ちたいという思いがあったからです。 てきました。苦しむ子どもたちの役に立 覚え、毎日財布から五十円、十円、五円、 次女は十九歳、 て一万円にして送ることにしたのです。 金箱に入れて一ヶ月ため、不足分を足し た)。私は、自分自身が家族を置いて、実 したので、CYRの活動を知って共感を 際の活動に参加する勇気がありませんで 一円のお金を大きいマーブルチョコの貯 国境近くのタイの難民収容所で避難生 カンボジアで内戦が起き、多くの難民 次女と次男が生まれました 次男は十八歳になりまし (現在、

何

ですか

支援を始めら

れたきっ

か

けは

CYRとの出会いは、

新聞記事で活動

確か活動資金が不足している現

を田島さんにうかがいました。

気持ちでCYRを支援し続けてきたのか

子育でのかたわら、

どのような

います ご家族 か 13 何 か おっ U やって

それにしても十七年もたってい

るのに、

す。 り応援するつもりです。 ボジアの人達への新聞(注・CYRが発行し を続けるための資金を確保するのは大変な ないといわれるまで続けるべきだと思い Rです」)も優しい心遣いだなと感心し、又、 れたり、日本に定住されたベトナムやカン 援助だけでなく、自立を促す活動を取り入 ことと察します。そんな状況の中で保育の きちんと活動報告をしているのも信用でき ていた四か国語の生活情報紙「こんにちはCY る点で、これからもCYRの活動が続く限 継続は力なり」で、 日本の社会情勢などを考えると、 始めたら援助は 思います。 んぱか)ることはできないのじゃないかと

は

一九八〇年のCYR設立当初より十

継続して会を支えている人の

田島敏子さん(横浜市在住、

五十歳)

お考 えですか 援 助 0 L١ てどのように

8

Reverberating Heart and Life

It is 17 years since CYR started.

We have been working with children of Refugee Camps in Thailand and Thai and Cambodian villages, and with resettlers in Japan from Viet Nam, Laos, and Cambodia

We shall see and hear how people who have been involved in CYR activities in various ways live and think "now" as they have been encouraged by the inherent power of growing children

Saving Coins in A Chocolate Box

Toshiko TAJIMA

Mrs. TAJIMA has supported CYR for 17 years since its establishment in 1980. What motivated her to continue her support for CYR while raising her own children?

What prompted you to start your support and help for CYR?

It was a newspaper article about CYR's lack of fund for their activities. I lost my eldest girl when she was nine months old (from congenital defects and heart disease). After her death, I joined a group supporting a workshop for the disabled in the neighborhood and UNESCO's monthly fund raising for children, hoping to be of some help for



始めた頃のお子さんたち

started her support for CYR

1980年、田島さんがCYRへの支援を Children in 1980 when Mrs. Tajima

suffering children.

At the time I read about refugees who escaped the civil war in Cambodia and lived in a camp along the Thai border, I had another girl and a boy (she is 19 and he 18 now). Since I did not have enough courage to participate in the activities by leaving my family behind, I decided to save small coins every day in an empty chocolate box. and at the end of month, I would add some more to make it to 10,000 yen and send it to CYR.

What do your family say?

My husband agreed to become a KDD volunteer (KDD supports NGOs by paying them a portion of payments for international calls made through KDD by KDD volunteers). He says that "those without money should offer their physical skills and those without skills should offer money". I think we should offer both money and labor. He is a member of the Lions Club in our community.

My children are not interested maybe because I don't force them. Unless they personally experience pain or sorrow, they will not be able to appreciate other people's pain or suffering, I think.

What do you think of the "Aid"?

"Continuing is a force". I think that we should continue aid until we are told that it is no longer needed. Looking at the situation in Japanese society, I suppose to secure funds for continuing activities is very difficult. I am impressed by CYR's thoughtfulness in supporting not only child care activities but encouraging self support by publishing newspaper for Vietnamese and Cambodian resettlers in Japan (CYR used to publish newspaper "Hello, This is CYR" on daily life in Japan in four languages) and by their regular newsletters and reports. This is another point that sustains my support for CYR. I will continue it so long as CYR continues its activities.

I am deeply concerned about the current situation in Cambodia where peace has not returned even after 17 years! When I see the photo of smiling children printed on CYR's receipts, I do feel a sort of relief and hope for them. I sincerely hope that CYR will preserve the original spirit which started their activities and continue with courage, endeavor and wisdom until the day when peace comes to Cambodia.



子どもには日本人、外国人と区別する意識はない Children do not distinguish people as the Japanese or non-Japanese

小さな国際交流

東京都北区立桜田保育園園長 石田桂子

修生として受け入れました。

旬の五日間、

CYRのタイ人職員を研

育支援事業」に参加しており、

十月下

が共同で行なっている「東南アジア保

にあります。当園は、

北区民とCYR 公団住宅の一角

下鉄の駅を降りた、

桜田保育園は、

都心から北へ伸びる

ました。子どもたちにとっては、外国 ですが理解する機会となったことと思 びを通して心で通じ合い、日本とは遠 の人と接し、言葉は通じなくても、遊 組の子どもは日本とタイの旗を作って たちはタイ語のあいさつを覚え、年長 研修の始まる数か月前から、 人、言葉があることを、漠然と 研修生のブリスナーさんを迎え 子ども

外国からの園児たち

児まで七十二人が通っていますが、そ という子どもが増えてきています。現 人。全体の一割を越え、 東京に住む外国人の増加を反映 十年ほど前から、 歳十一か月のヒーチンちゃんは、 桜田保育園には、 両親またはどちらかの出身が外国 バングラデシュ、 外国人を親にもつ子どもは九 ベトナムと多様です。 保育園児の中に 0歳児から五歳 中国、 出身国もアメ フィリ

今年の四月に二歳のお兄ちゃんと一緒に はおもちゃで遊んでいるお友達に めて七か月たった今では、 入園しました。 ワッテ」と言うことができました。 などの言葉も覚えました。先日 (他の子どもが悪いことをした 出身は韓国です。 「センセイ」 カ

さんたちは、 のうち、ヒーチンちゃんの方で、話せな はあまり通じていなかったようです。そ がよくなかったのか、ヒーチンちゃんに だいたりしました。でも、私たちの発音 た時や誉めてあげたい時に、何と言って としたりというように。 くても日本語が分かるようになりまし 調べたり、お母さんに言葉を教えていた いか分からず、図書館に行って単語を 入園当初は言葉がうまく通じず、 帽子をかぶって自分から靴をはこう 「お散歩に行きますよ」と言った ヒーチンちゃんが泣き出し 保母

保育園での国際交流

ど、それぞれの保母さんが自発的に工夫

ちもヒーチンちゃんみたいなお友達だと を知ること。 ます。一つは日本とは違う国があること の違うプリスナーさんを迎えて、 流・国際理解には三つの点があると思い たちはタイという国があることを知りま 私たちが保育園で実践している国際交 二つ目は、 例えば、 外国に住んでいる人た 今回肌の色や言葉

だ幼いので、 理解すること。保育園の子どもたちはま 別なことはしていません。このように、 ち保育者も日本語しか使いませんし、特 区別する意識はなく、 じかに違う国の人と接することによっ ヒーチン」と呼んでいます。私た

あります。そのような時には、必ずじか さんたちと話をするには、多少の困難が 葉を覚えてしまうので心配ありません 動を起こすことです。子どもは、すぐ言 ていくことができるでしょう。 を使って筆談したり、 に会って説明し、出身国によっては漢字 が、保母さんが外国人のお父さんやお母 たちとコミュニケーションするための行 マ字で書いたり、 そして三つ目は、言葉や文化の違う人 絵を描いて知らせるな 連絡ノートをロ

心の保育をしていきたいと思います。 子どもたちがお互いの文化を理解し、 して、異文化に触れることによって心豊 このような小さな国際交流を通して、 育ち合うことができるように、 たくましく成長してほしいと

お友達を日本人、

外国人と

遠和感なく「ヒー

子どもたちも、保育に関わる私たち 自然な形で外国の人たちとつき合

Small Scale International Exchange

Keiko ISHIDA Sakurada Nursery School, Kita City, Tokyo

Sakurada Nursery School is located in a corner of the public housing area near a station of the new subway line connecting the center and the suburbs of Tokyo. As a part of Support Activities for Child Care in SE Asia jointly sponsored by people of Kita City and CYR, the Nursery School received a CYR Thai staff as a trainee for five days in late October.

For several months prior to the start of training, children learned greetings in Thai language and older ones made national flags of Japan and Thailand to welcome Prisana, the trainee. As they met a person from a foreign country and made personal contact through games without any knowledge of her language, they must have learned about her country, people and language which are different from Japan.

Children from foreign families

Reflecting an increase of foreign people living in Tokyo, we have an increasing number of children whose parent or parents come from countries other than Japan. At present, nine children or more than 10% of 72 children aged 0 to 5 are from non-Japanese families such as the United States, Bangladesh, China, the Philippines, Korea and Vietnam.

Hee Jin is 23 months old and joined the School last April with her 2year old brother. They come from Korea.

After seven months at the Scool, she learned to say "Sensei (teacher)", "Me'i!
(Don't do it)", etc. The other day, she told a friend who was playing with a toy "Kawatte (it's my turn, now)".

Child minders did not know what to say to her in the beginning when she cried or when she was to be praised, and went to the library to pick up words or asked her mother what to say. Maybe we were not pronouncing correctly, because Hee Jin did not understand us. Day by day, she began to understand Japanese even if she could not speak it. When told that we were going for a walk, she put on her hat and shoes!

International exchange at the Nursery School

There are three features to international exchange and understanding at the School. One is to know that there are countries which are different from Japan. For instance, children learned about Thailand when they welcomed Prisana who spoke differently and had different color complexion. The second point is to understand that people living in foreign countries are friends like Hee Jin. Young children do not distinguish people as the Japanese or non-Japanese. As grown ups, we child minders use the Japanese language only and treat the non-Japanese

children as we do the Japanese. Through direct contact with foreign people, children and grown-ups will relate to them naturally.

The third point is to start actions in order to communicate with people with different languages and cultures. Children learn new words very easily, but we have difficulties talking to parents who are not Japanese. Child minders try to meet them face to face to explain things, to write messages in Chinese characters or in English alphabets depending on which country they are from, or even to draw pictures.

Through these modest international exchanges, we hope to nurture children's mind so that they will grow to appreciate each other's culture, to help each other and to share the pleasure of growing. I hope that they will grow to have rich emotions and to become strong through contacts with foreign culture.



韓国からきたヒーチンちゃん(右) Hee Jin from Korea (Right)

カンボジアの公立幼

ル県で新園舎のオープニング

Cooperation for Construction of Public Preschool in Cambodia

On October 9, the dedication ceremony of a new building for Anlung Romeat Preschool was held, attended by the Administrative Vice-Minister of the Ministry of Education, Youth and Sports (MoEYS), Vice Governors of the Province and the District, Secretary of the Japanese Embassy, other guests, elementry school children, community people, and Masakatsu Fukamizu, CYR's Representative Director. The building was constructed with aid from CYR in response to the request from MoEYS.

The preschool in Kandal Stung District, Kandal Province has been serving 198 children aged three to five in the space rented from the elementary school. There are six other preschools in the District, but none has its own building.

Construction of the new building was made possible by donation from Nagoya Station Area Development Association (28 companies). Children's parents and guardians also helped by donations and primary school children by carrying soil, etc. to complete the building in September when the new school year started.

In the brand new building, children are so cheerful singing songs with teachers and playing games with toys offered by CYR that older children from the neighboring elementary school come to take a look. CYR will continue its cooperation for management of the preschool.

室を借りて運営されてきた。 には他に六つの幼稚園があるが

祝った。 CYRからは深水正勝代 表理事が出席した。 にあるこの幼稚園は、 カンダール県カンダー 々が出席し、 省事務次官、 日本大使館書記官をはじめと および小学生や地域の 新園舎の完成を 式典には教 小学校の教 三~五歳 郡副郡

使ってゲームをしたりと、 に協力して 完成後も継続して幼稚園の もたちが先生と一緒に歌を歌 また保護者からも寄付を募り からの寄付によって実現した。 敷地内の 月に完成した。 区振興 ずれもまだ園舎はない 新しい教室では、 新園舎の建設は、 CYRが提供した教材を 会 関舎は新学期の始まる 小学生は土運びなどで CYRTL 「名古屋駅



式典には僧侶や住民、小学生 も参加した。左奥が新園舎。

Priests, community people and school children also attended the ceremony The new building is to the rear left.

子どもたちの明日

Children, Our Future CYR News No.44

発行日 ■ Published

1997年12月5日 December 5, 1997

発行人 ■ Publisher

深水正勝 Masakatsu Fukamizu

編集責任者 ■ Editorial Director

関口晴美 Harumi Sekiguchi

翻訳 # Translation

大井幸子 Sachiko Ohi

印刷■Printing

(株) 三興印刷 Sanko Printing Co., Ltd.

発送 ■ Circulation

CYR ボランティア CYR Volunteers

定 佰 200 円 (会員は会費に含む) Price 200yen (included in member fee)



CARING FOR YOUNG REFUGEES 幼い難民を考える会

〒 160-0012 東京都新宿区南元町 6-2 東京事務局 ☎ 03-3353-9947 FAX 03-3353-9739

CYRの活動をご支援ください

正会員

10,000円

賛助会員(団体) 30,000円

3,000円

賛助会員(個人) 規定なし

下記の口座に「入会」とご明記の上ご送金ください。資料をお送りいたします。

郵便振替 口座番号 00110-8-36227

銀行振込 第一勧業銀行広尾支店 普通 057-1280817

幼い難民を考える会は、難民になったカンボジアの子どもたちが けんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。 1992年までタイの難民キャンプで保育センターを運営してきました。 現在はタイとカンボジアの農村で、子どもたちが健やかに育つことの できる場所づくりをめざして、主に村の保育所を中心に、子どもと女 性を対象とした活動を続けています。

Head Office: 6-2, Minamimotomachi, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0012, Japan : Red Rose Court #C-1, 110/6 Pradipat Rd., Bangkok 10400,

Thailand 279-8837

Phnom Penh: No.98 St.432 Sangkat Toul TumpoungII, Khan Chamkar Mon, Phonom Penh, Cambodia 22-720849